Los Angeles Times

1987 年 2 月 15 日

ART NEWS CALENDAR

“雨のパビリオン”
AT カリフォルニア大学ノースリッジ校

By ZAN DUBIN

これほど多くの人が、これほど珍しいアートワークを作成するのにこれほど少数の人を助けたことはありません。
角永和夫の最新の彫刻は、何千もの蚕繭でできています。そしてそうです、アーティストは毛むくじゃらの動物を使って卵形の家を自分の作品に紡ぎました-10 万頭以上をなだめました。約 90 個のピースを生産する生き物。日本人アーティストの角永が、3 月 28 日（土）からスペースギャラリー（6015 サンタモニカブルバード）で開催される「シルク」の作品をここに持ち込みました。
角永の作品を 2 回展示したことのある宇宙局長のエド・ラウ氏は、角永は、ワームに繊細な住居を形成させるための無数の小さな穴または「ニッチ」を備えた、正方形、丸みを帯びた木製のフレームを構築したと述べました。全体的な効果は幾何学的でありながら穏やかです。高さ 6 インチから 6 フィートの範囲の堅いフレームは、それらを埋める白い綿のボールのような繭によって柔らかく見えます。
角永は、自分の人間の力だけでなく、自然の力で芸術を形作るのが好きです。これは、日本の美学に共通する考えです。絹の作品の背後にある考え方は、毛虫が彼らの場所を選ぶということです。角永はワームを捕まえて配置しません。ワームは留まらないからです。しかし、彼は約 2 日夜起きて、フレームを回さなければなりません。そうしないと、毛虫はすべて上部になります。彼らは上に這い、そこでニッチを探す傾向があります。」
そして、蚕が羽を持って出現する準備ができたら、カイコはどうなりますか？
“「角永は彼らを熱し、殺します」とラウは謝罪の口調で言った。 「さもなければ、ギャラリーのいたるところに蝶がいるでしょう！」